博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	山岡　華菜子
論　文　題　目	京阪式アクセント地域におけるアクセント変化の研究

審査要旨

本論文は、京阪式アクセント地域、とくに淡路島ならびに大阪湾を隔てた対岸の大阪府南部および和歌山県北部におけるアクセントを実地調査し、その結果を分析したものである。これらの地域に聞かれるアクセントが、近世以降現代にいたる京阪式アクセントの歴史的変遷のうえにどのように位置付けられるかという観点に立って考察するところから、現代京都アクセントと京阪式アクセントの古い姿をとどめるといわれる高知の調査結果をも加えて、都合14地点のアクセントを比較考察している。

これまでの京阪式アクセント諸地域のアクセント史的研究は、京都アクセントの歴史を考える資料として利用されることが多かったが、本論文で取り上げる淡路島や紀伊半島中西部には、これまで知られることのなかったアクセント変化が観察されることもしばしばある。本論文は、それらの実態を明らかにしながら、あわせて京阪式アクセントの歴史的空白を埋めて、それらを総合的に説明することを目指すものである。

まず「序章　研究対象と京都アクセント」においては、アクセントを表示する方法、調査地点ならびに調査方法、調査語彙などを説明する。とくに調査対象者については、それぞれの調査地域において言語形成期を過ごしたこと、現在もその地域あるいは付近の地域に居住すること、地域との関わりの深い生業に就いていることを条件として協力を依頼し、人数は高年層（60代以上）、中年層（40代～50代）、若年層（20代～30代）の三世代に分かってほとんどの地域で男女を問わず2人以上を調べている。また、調査語彙は、1拍から3拍の名詞（助詞付きの文節形式、文形式なども）、2拍・3拍の動詞と3拍の形容詞（ともに諸活用形も）、および形容詞型活用をする助動詞などから構成され、それぞれ調査票を読み上げる形式の調査を行った。

「第1章　名詞のアクセント」の「第1節　二拍名詞第4類と第5類の合同傾向」においては、いわゆる第4類名詞、たとえば「かた（肩）」「うみ（海）」などと、第5類名詞、たとえば「あめ（雨）」「あき（秋）」などとが大阪などでアクセント上の区別をなくしつつあることがこれまでにも報告されてきたが、それと同じ変化を淡路島の調査地点で確認し、とくに淡路島福良においてこれまでに知られていない変化類型を見つけていることは実地調査の報告としても評価できるものである。

同じく第1章の「第2節　三拍名詞第2類・第4類のアクセント変化」においては、中世後期以降HHL型であったとされる「あずき（小豆）」「かがみ（鏡）」などの語が、各地でLHL、HLL、HHHなどに変化して発音されていることについて考察したものである（以下、高拍をH、低拍をLと記す）。その変化の要因として、「アクセント型の統合」（→HLL）、「語を構成する子音・母音との関係（第1音節が無声子音で第2音声が広母音、とくに /a/ ）」（→LHL）、「多数型への合流」（→HHH）などのことが考えられ、ほかに「語の馴染み度」も関与しているのではないかと論じている。

「第2章　動詞のアクセント」の「第1節　一段動詞の五段化傾向とアクセント」では、淡路・紀伊半島中西部の各地に聞かれる一段活用の五段化現象について、これが三拍第二類アクセントの一段活用動詞に起ったとした場合、それらの語に起きたとされるアクセント変化との関係について考察したものである。たとえば「おきる（起）」という動詞はもと一段活用でオキルHLL、オキタLHL、オキンHLL、オキョーHLL（オキヨーHLLL）、オキルナHLLL、オキィLFという活用形アクセントを持っていたのであるが、それが五段化すれば、オキルHLL、オキランHHLL、オキローHHLL、オキルナHLLL、オキレHLLなどという活用形アクセントをもつようになるものと思われる。

ところが、京阪式アクセント地域では、ほぼ同時期に一段活用動詞オキルはオキルLLH、オキタ

氏名　山岡 華菜子

LHL、オキン LLH、オキョーLLH（オキヨーLLHH～LLLH）、オキルナ LLHL、オキィ LF という変化を起こした。もしこの変化よりも五段化が早く起きていれば、その地域のオキルという動詞は、五段活用動詞として定着していたわけで、そのあとオキル HHH、オキラン HHHH、オキローHHHH、オキルナ HHLL～HHHL、オキレ HHL などというアクセントに変化したと推定される。

淡路・紀伊半島中西部においては、語形そのものがラ行から外れてヤ行に変化したものもあって五段化の程度も一様とはいえないが、著者は、五段化が生じても三拍動詞第二類のアクセント変化に影響することはなかったと述べている。それは、たとえば淡路洲本や福良などの五段化した活用形アクセントは、オキル LLH、オキラン LLLH、オキロ LLH、オキレ LHL である、というところにあらわれている。このことから著者は、この地域の五段化とアクセントとの関係について、五段化が生じてもそれによってアクセントの式が変わることはないと結論する。

「第 2 節　二拍および三拍動詞の禁止形アクセント」においては、たとえば禁止形「買うな」「敗けるな」などにそれぞれ HLL～HHL、HHLL～HHHL というアクセントのゆれがみられることについて、これらを「古い終止形」から「新しい終止形」へと置き換わる過程にあらわれたものと認定し、地域によって遅速の違いがあることを報告している。

「第 3 節　三拍動詞第 2 類のアクセント変化」は、この変化の原因をさまざまに考察したものである。これまで変化の要因とされてきた H2 型（HHLL、HHL など）と H1 型（HLLL、HLL など）との「型の統合」は言われるほどに顕著ではなかったことを指摘する一方で、「接続連用形」とされるもののアクセントも、そのあらわれる時期からみて変化の原因にはなりにくいと述べている。

「第 3 章　形容詞ならびに形容詞型活用の付属語のアクセント」の「第 1 節　三拍形容詞のアクセント変化」は、京阪式アクセントに従来言われてきたものとは異なるアクセント変化が存在することを指摘し、それを形容詞活用形のアクセント体系という観点から説明を試みている。

つづく「第 2 節　付属語「らしい」のアクセント」および「第 3 節　付属語「たい」のアクセント」は、本論文のもっとも注目すべきところである。そもそも推定の「らしい」は形容詞型活用の助動詞で、古くは形容詞の活用語尾としてアクセント上も機能していた。それが付属語として独立的に機能するようになる様子が、高知・京都と淡路・紀伊半島中西部の調査からみえてくる。また、希望をあらわす助動詞「たい」の付いた形のアクセントも同様な経緯を想定できるという。ただし、いずれの場合もその背景に形容詞アクセント体系の変遷があり、それぞれの変化の遅速の具合で、これらの地域にあらわれる多様なアクセントも解釈ができると主張する。このような問題を取り上げて方言アクセントと文法との関係から京阪式アクセントの歴史に論及することは、これまでにほとんどなかった視点である。

本研究は、淡路・紀伊半島中西部を中心に聞かれる方言アクセントを、京都・高知のそれと比較しながら検討し、京阪式アクセントの史的変遷という大きな枠組みの中に位置付けて論じたものであって、従来から言われる「アクセント体系」と「アクセント型の統合」という捉え方を継承しつつも、それだけにとどまらず文法的機能との関係において付属語のアクセントを捉えようとしているところは評価に値する。

以上の理由から、本論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであると判定する。

公開審査会開催日	2017 年　1　月　7　日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院　教授	上野　和昭	日本語学	博士（文学）早稲田大学
審査委員	早稲田大学文学学術院　教授	高梨　信博	日本語学	
審査委員	早稲田大学文学学術院　教授	森山　卓郎	日本語学	学術博士（大阪大学）
審査委員				